

Agarato

すべての命とみらいを拓く

すべての命に有難う。



Agarato

株式会社あがらと
Tel:0735-75-0075
Mail:info@agarato.jp
Web:www.agarato.jp



Instagram



Facebook



Twitter



Web



Lead the Future with All Lives

すべての命とみらいを拓く

人々は今も大自然の中で、すべての命と共に、その一員として生きています。過剰に奪うことをせず、穢すことをせず、すべての命に感謝しながら、少しでも人の知恵と手を加えて、豊かに暮らしているのです。一方で、現代の日本に生きる多くの人のために、自分たちがたくさん命と共有していることを意識するのは、難しいことかもしれません。身の回りには、便利なものが溢れています。ずっとたどっていけば何かしらの形で、自然の中にあつたものを元に作られているはず。しかし、高度な技術で精製され整えられた結果、自然との結びつきを感じるには、とても難しくなりました。

に垣根のない町からできること。それはすべての命と共に、より豊かな暮らしを拓いていくことだと思えます。ただすべての命と共にあるのではなく、人だからこそできる新たな視点や価値を加えて、『拓いて』ゆくのです。人はその知恵をもって、手をもつて、自然が自然のままでは起こせないこと、起こしても時間がかかることを、効率的に、効果的に起こし、活用してきました。そしてそれは本来、人の為だけでなく、人にも自然にも喜ばしい『何か』をもたらしてきました。すべての命と生きるとは、そういうこと。決して人の為だけに、命を利用しすり減らすことではありません。



せん。人が、すべての命の一員であり続けるように。そこに新たな視点や価値を加えて、さらなる豊かさが生まれるように。そんな想いを作物に乗せ、商品に乗せ活動するのが、私たち『あがら』です。

Column Vol.1
昔ながらの道具を手作り

すべての命と生きる農業に欠かせない古き良き道具は、時に手作りしています。田車（写真右下）もその一つ。



Live with All Beings

すべての命と生きる

From Kozagawa
Village where is No Barrier
Among Human and the
Nature

人と自然に垣根のない
和歌山県の山奥から

和歌山県の南のほう、古座川町という山間の町で、私たち『あがら』は活動しています。東京23区の半分程の広さに、人口はわずか2700人程度（2019年現在）。面積の約96%が山林で、数々の清流に恵まれ、人よりも鹿が多い、そんな町です。

古座川町には、ないものがたくさんあります。信号機もコンビニもありません。そして何より、『人と自然の垣根』がないのです。鮎やアマゴといった川のめぐみ、鹿やイノシシ・山菜といった山のめぐみ、そして古くから稲作や林業を支えてきた、自然のめぐみ。

Three Blessing of nature:
Vegetable, Rice and Edible Rose

野菜・米・食用薔薇の3つのめぐみ

あがらとでは、農薬・化学肥料・動物性肥料を使わない植物性自然栽培という農法を軸に、3つのめぐみをいただいて事業を行っています。栽培方法についてはこの冊子の中で説明していきますが、まずは、それぞれのめぐみを簡単にご紹介。



01_ 野菜のめぐみ

西洋野菜と一般野菜を織り交ぜた、多品目栽培を行っています。多品目栽培は、気候変動による収穫量への影響を最小限にとどめるだけでなく、山間の比較的小さな農地を有効活用でき、植物同士が良い影響を及ぼし合う、自然のこころ・地のこころに即した選択です。食べ物は人がたくさんの命と共にあることを実感する、最も身近で日常的な存在。野菜を通して、その普遍的な事実を見つめ直すきっかけになればと考えています。



02_ お米のめぐみ

古座川町で古くから親しまれた『香り米』を中心に、手植えや手刈り、天日干し等の伝統的な農法を織り交ぜて栽培を行っています。町内でも流通が途絶えていた香り米を、復活させる形で栽培を開始。香り米の栽培をきっかけに町内の先輩方からもご指導をいただき、関係性も格段に深まりました。去年のめぐみを糧にして、今年めぐみを育む。そうして遥か昔から伝え紡がれてきた稲と人の歴史から、人としての在り方を学ぶ、そんな機会にもなっています。



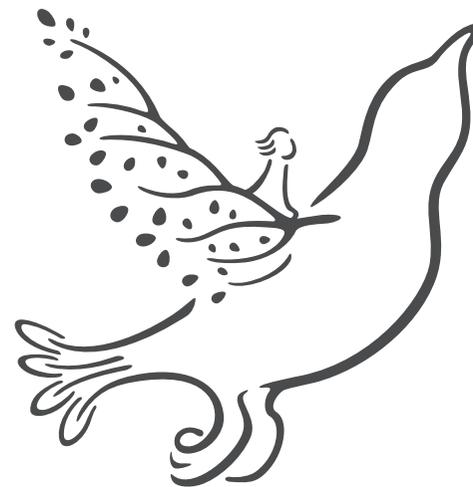
03_ 食用薔薇のめぐみ

薔薇はクレオパトラの時代から人々に愛され親しまれてきた、人との関りが最も深い花の一つです。その美しさで人々を魅了するだけでなく、美容や健康面でも様々な効果効能が知られる、まさに花の女王。一方で、薔薇が食べられることは、ほとんど知られていません。薔薇を味わうという特別な体験が、その育て方や背景、ひいては自然全体のことを考え、感じるきっかけになることを願っています。

With Plants, Animals and Humans

植物も、動物も、人間も一緒に

“すべての命”には、あらゆる生命が含まれます。
みらいに向けて、すべての命と共にどうありたいか、ロゴマークに込めました。



あがらとの近くにある大銀杏。400年もの間、野生動物や鳥、人にも恵みを与え続けている。

樹木のような羽、葉っぱのような尾の鳥が、少女を乗せてはばたく、あがらとのロゴマーク。このマークは、植物も動物も人間も、すべての命が同じ世界の中で共にあり続けるというコンセプトを表現したものです。より豊かなみらいを拓いていく上昇感や高揚感を、未来へとはばたくイメージに込めました。



| Think how to be together with the Mother Earth |

地球からあずかり、還し、未来へ送る

資源はあずかり物

人は、ゼロからモノを作り出すことはできません。スマートフォンやパソコン・車、あらゆるものは、地球の資源から作られています。資源は地球からもらったものではなく、あくまで『あずかった』もの。あずかり物ですから、大切にすることはもちろんのこと、最終的には地球へ還すか、次の担い手へ送りつなぐなくてはなりません。

そんな視点で見ると、何をあずかるか、あずかったものをどう活用するか、選択や行動が変わってくるはず。あがらとの選択や行動は、すべてこの視点に基づいています。

地球へ還すことまでイメージする

あがらとでは地球から資源をあずかるとき、地球に負担のない範囲で、いつか還すときのことまでをイメージします。

例えば竹は成長が早く次々と出てくるので、あずかっても自然への悪影響が少なく、優秀な地球資源。燃やしたり粉碎したりすれば、土に還すことができます。

そこで考え出したのが、竹を骨組みに使った竹ハウス。病害虫や害獣除けを目的にした、あがらとオリジナルの栽培用ハウスです。竹ハウスを作るときは竹に防腐防虫加工をしますが、柿渋と松煙という自然素材を使い、土に還す際の妨げに



ならないように工夫しました。廃瓦を使った水路も、砕けば土に還すことができます。あがらと流の選択です。

何年先になるかわからないけれど、形あるものはいつか役目を終えるときが来ます。初めからその時のことまで想像を膨らませておくことで、地球からのあずかり物をきちんと還すことができるのです。

Column Vol.2 放棄竹林解決の一助に

日本各地で、手入れの行き届かない竹藪が荒れて問題になっています。竹のチカラを借りてハウスを建てることは、人と竹との接点を取り戻し、こういった問題の解決にもつながっていくのです。





Earth resources
are for future generations too

**地球の資源を
未来へ送る**

地球資源とは、今すでに形あるものだけではありません。これから生まれ育っていくもの、そのポテンシャル、姿かたちを変えて生まれ変わる分子・原子まで、すべてが資源です。

こういった資源を未来へと送りつなぐことは、今を生きる私たちの役目。

地球の資源を『あずかる』という視点だけでなく、これから育っていく資源を守り、増やし、未来へと送りつなぐ視点を持つことで、すべての命と共にみらいを拓いていくためのベースを作っています。



**還せないものは
次の担い手へ**

私たちの身の回りは、簡単には地球へ還せないあずかり物で溢れています。世界中にあふれかえるプラスチックゴミは、その最たる例。あずかり物だという認識を持たず、還すことを

想像せずに、どんどんあずかり続けた結果です。

還せないものは安易に捨てるのではなく、次の担い手へとつないで、できるだけ長く活躍してもらおうのがあがらと流。竹ハウスを覆うナイロンのメッシュシートは、実は建築現場の足場廃材を再利用したもの。十分な強度を保っているが、通常は産業廃棄物として捨てられてしまうのだそうです。

この他にも、卵パックやペットボトルを再利用して、育苗用のポットなどに活用しています。



Column Vol.3 **実証実験は自然の中で**

竹ハウスが現在の形になるまでには、様々な組み方を試し、幾度も倒壊を経験しています。春一番や台風といった自然の脅威での実証実験のおかげで、最も強い形に行きつくことができました。

微生物と仲良くなる

おいしい土を育む

あがらとでは、微生物とチカラを合わせ、土を育てています。目指すのは、口に含むと思わず飲み込んでしまいそうになるような、『おいしい土』。言い換えればそれは、多様な微生物がバランスよく共生する土です。

農薬や化学肥料は、効率よく均一にたくさん作物を育てるには便利なものですが、反面、微生物にとって住みにくい環境を作ってしまう要因でもあります。だからあがらとでは、農薬・化学肥料・動物性肥料を使用しません。動物性の肥料も使わない農法は珍しいで

すが、これは家畜が口にしたり抗生剤や飼料の農薬があがらとの畑や作物を介し、食べた人の体内にまで入ってしまうのを避けるため。

微生物の自然のチカラで育まれた土は、植物の本来のチカラを引き出してくれます。例えばあがらとの薔薇は一般的な食用花と異なり、花びらに苦みが少なくほのかな甘みすら感じる程。自然で豊かな香りが強いのも特徴です。

食の安心・安全が担保できるだけでなく、土の中の微生物や植物にとって嬉しく、食べておいしいあがらとの農法。その基礎となる

のが、『おいしい土』なのです。

Foster
Delicious
Soil



微生物がつくる

『ぼかし肥料』と

『落ち葉堆肥』

『ぼかし』と呼ばれる、昔ながらの植物性肥料をご存知でしょうか。もみ殻や米ぬか、油粕などを、微生物のチカラを借りて発酵させて作ります。たくさん微生物が生きている『ぼかし』は単なる肥料分としてだけでなく、土のバランスを保

ち、生きたチカラのある土にしてくれる、あがらとにとって欠かせない存在です。また、落ち葉や枯草を積み上げておくと、自然に発酵して堆肥になります。人が積み上げて、微生物が分解するという、まさに連携作業。人の都合を押し付ける

のではなく、微生物にとっても嬉しい共生関係によって育まれた、最も自然な状態に近い肥料と堆肥。あがらとの作物たちを支え、栄養素となり、食べる人を育む源です。

All Microbiota
Makes Our
Composts



Column Vol.4 / 冬の間にはぼかしをつくる

ぼかし肥料は、冬の間で自分たちで材料を調合し、微生物に発酵してもらって作ります。程よく発酵したら、毎日混ぜては広げてを繰り返して乾燥。微生物にとっても、あがらとのメンバーにとっても、冬の間の大仕事です。



ない大きなもの、『すべての命とみらいを拓く』というビジョンをみんなで形にしたい、という想いが込められています。

野菜作りを教えてくれる、近所のおかあさん。田んぼの脇を通るたび、声をかけてくれるおじいちゃんおばあちゃん。人と自然に垣根のないこの地で生きていくと、人は一人では生きられないことを実感せずにはいられません。

『私たち』だけでは無力だけれど、『私たち』と『共』にあるすべての人々、すべての命のおかげで、できることがたくさんあるのです。この冊子を手にとっていただき、最後までお読みいただき、本当に有難うございます。



あなたはもう、「あがら」と、すべての命と共にあります。

あがら（＝私たち）と一緒に

Together With Us = Agarato



あがら「と」に
込めた想い

『あがら』という社名は、和歌山県紀南地方の方言である『あがら』＝私たち、と、『と』と一緒に『の』と『を』を組み合わせたものです。

私たちは、和歌山の山奥で荒れた土地の草を刈り、耕し、竹でハウスを建てて、微生物と仲良くなり、清流古座川の水に潤してもらいながら、日々たくさん命と共に生きています。でも、私たちにできるのは、作物を、商品を作り、送り出すところまで。

実際に選んでいただいて、食べていただいて、初めて意味をもつと思うのです。

『あがら』という社名には、私たちだけでは成し得